様式 C-7-2

自己評価報告書

平成　23　年　4　月　18　日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2008～2011
課題番号：20402024
研究課題名（和文）　国家社会主義からの離脱・進化の多様性：市場経済化の国家戦略・制御能力の比較研究
研究課題名（英文）　Varieties of Exit and Evolution from State Socialism: A Comparative Study of the State Strategy and Capacity for Establishing Market Economy
研究代表者
堀林　巧　(Horibayashi Takumi)
金沢大学・経済学経営学系・教授
研究者番号：70143873

研究分野：比較経済システム論
科研費の分科・細目：経済学・経済政策
キーワード：国家社会主義、市場経済化、進化、旧ソ連・東欧、中国、国家戦略、国家の制御能力

１．研究計画の概要

旧ソ連・中東欧諸国、中国の国家社会主義からの離脱とその後の経済社会システムの進化は多様であった。その多様性を、上記諸国のいずれかを研究対象としている研究代表者・研究分担者あわせて７名の海外調査、海外研究者との交流を含む共同研究によって解明するというのが本研究計画の課題であった。その際、以下の２つの問題を検討することにより、市場経済化の多様性にアプローチする方法をとることとした。

（１）それぞれの国家がどのような市場経済化戦略を取ってきたのか。

（２）それぞれの国家が市場経済化の諸課題を遂行する能力、またその過程で生じる様々な問題を制御する能力をどの程度有してきたのか。

旧ソ連についてはロシアとバルト諸国、中東欧についてはヴィッシェグラード（中欧）諸国とスロヴェニア、さらにブルガリア、ルーマニア（南東欧）を主な研究対象国とした。本研究実施にあたっては、中国、ロシアで現地調査を、バルト諸国についてはラトヴィアなど、東欧諸国についてはハンガリー、ブルガリア、ルーマニアなどで現地調査を実施することを計画した。

3 年目には、2 年間の成果に基づき、イギリスでワークショップを開催、日本にハンガリーの専門家を招き研究会（ワークショップ）を開き、残された課題を明らかにし、4 年目にさらに研究を深め、計画課題解明に努めるというのが当初の計画であった。

２．研究の進捗状況

これまでにロシア、中国、ハンガリー、ラトヴィア、ルーマニア、ブルガリアで現地調査を実施した。3 年目の平成 22 年度にはイギリスのバーミンガム大学ロシア東欧研究センターのスタッフと研究代表者及び研究分担者 2 名による合同ワークショップを開催した（開催地バーミンガム大学）。同年度にはハンガリー科学アカデミー経済研究所のスタッフ、チャナディー氏を招きワークショップを京都大学経済研究所で開催した。

旧ソ連のうちロシアについて現在までに明らかになっているのは、エリツィン時代に自由主義的な市場経済が国家戦略として追求されたが、それを推し進める統治能力は未成熟であり、プーチン時代になり国家介入（特に、資源部門）が強まり国家資本主義の色彩が強まっている。他方で、国家社会主義時代に築かれたパトロンークライエント関係が国家－企業－従業員関係に強く残っている。メドベージェフ大統領は「近代化」を唱えているが、近代化が西欧化に至るかどうかまだ定かでない。バルト諸国の国家は概ねマクロ経済安定化に成功し、自由主義的市場経済を形成することに成功したが、金融面での外資依存が 2008 年の欧州金融危機のバルト諸国への波及の要因となった。現在同諸国は経済回復基調にある。

東欧諸国のうちヴィッシェグラード諸国は、1990 年代後半以降、外資導入を加速する国家戦略を取り外資系企業による輸出志向経済を構築した。同戦略は 2008 年の世界不況までは功を奏したが、過度の外資依存・

輸出依存が 2008 年以後は裏目に出たといえる。ブルガリア、ルーマニアもヴィッシェグラード諸国の後を追う戦略を取っている。
中国は「非流通株」の政府保有などを通じて戦略的産業と金融部門の国家管理を維持する国家戦略を取り成果を収めてきた。スロヴェニアと中国は国家が漸進的市場経済化を進める制御能力を有してきた例である。以上が進捗状況の概要である。

３．現在までの達成度

②「おおむね順調に進展している」
（理由）
ほぼ計画通りに海外調査、（ワークショップ開催など）国外専門家との研究交流を実施してきており、研究代表者と研究分担者のそれぞれが、本計画に関する成果を論文刊行、学会報告、図書刊行を通じて世に問うてきているからである。

４．今後の研究の推進方策

旧ソ連のうちロシアについてはソ連国家社会主義の遺産としてのパターナリズムが、グローバル化のなかでいかに変容するかという論点解明に向けてさらに研究を深める。
バルト諸国及びヴィッシェグラード諸国については経済面の国家戦略とあわせて、ナショナリズムをいかにコントロールするかという側面（これも国家の制御能力と関わる）の論点解明が必要である。ブルガリア、ルーマニアについてもそうである。最終年度には研究代表者と研究分担者２人が海外渡航を含め、この論点を検討する。
中国については、海外渡航を含め 2010 年の最新データを分析し国家の重要産業支配の実態をより明らかにする。以上が最終年度（今後）の研究推進方策の概要である。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 23 件）
①Takumi Horibayashi, Characteristics of Systemic Change of Central and Eastern European Countries, *The Journal of Comparative Economic Studies*, Vol. 6 (2011) ,pp.35-57.査読有。
②Dimiter Ialnazov and Nikolay Nemovsky, “A Game theory Interpretation of the Post-Communist Evolution”, Journal of Economic Issue, Vol4,No.1(2011),pp.41-56.査読有。
③金岡克文「中国における非流通株改革に関する一考察：中国株式市場の分断と統合」『人間社会環境研究』第 21 号(2011)101-118 頁。査読有。
④溝端佐登史「成長と危機のなかのロシア企業社会：新興市場と企業社会研究」『比較経営研究』第 34 号（2010）20-41 頁。査読有。
⑤Hiroaki Hayashi, “Social Impact of the Global Economic Crisis in Russia”, *The Journal of Comparative Economic Studies*, Vol.5 (2009), pp. 47-60.査読有。

〔学会発表〕（計 26 件）
①堀林巧「中東欧の資本主義化と生活保障システムの変容」ロシア・東欧学会と JSEES 合同全国大会。2010 年 10 月 23 日。天理大学(奈良県)
② Takumi Horibayashi, “Varieties and Dynamics of Capitalism in Developed Countries and Characteristics of Capitalism in Central and Eastern European countries”, Joint Workshop in the University of Birmingham, UK. 22 Sep.2010.
③ Satoshi Mizobata, “Russian Business Society and Corporate Responsibility” Joint Workshop in the University of Birmingham, UK. 22 Sep. 2010.
④Hiroaki Hayashi, “ Marketization and Reorganization of Lifestyle in Russia”, Bi-Annual Conference of European For Comparative Economic Studies, in Tartu, Estonia, 28 Aug, 2010.
⑤溝端佐登史「企業の社会的責任からとらえるロシア企業社会」比較経済体制学会第 50 回全国大会。2010 年 6 月 6 日。大阪市立大学（大阪府）

〔図書〕（計 10 件）
①溝端佐登史ほか 2 名編『市場経済の多様性と経営学』ミネルヴァ書房、2010 年。（溝端佐登史は序章と最終章、堀林巧は第 4 章執筆。総 256 頁）。
②中屋信彦「中国鉄鋼業における立地と技術の政治経済学」平川均ほか 3 名編著『東アジアの新産業集積：地域発展と競争・共生』学術出版社、2010 年。総 608 頁。中屋担当は 377-410 頁。
③野村真理『ガリツィアのユダヤ人：ポーランド人とウクライナ人のはざまで』人文書院、2008 年。総 270 頁。